

その第一は、
第二は、
第三は、
第四は、
第五は、
第六は、
第七は、
第八は、
第九は、
第十は、

西の國は、
東の國は、
南の國は、
北の國は、
東の國は、
西の國は、
南の國は、
北の國は、
東の國は、
西の國は、
南の國は、
北の國は、

西の國は、
東の國は、
南の國は、
北の國は、
東の國は、
西の國は、
南の國は、
北の國は、
東の國は、
西の國は、
南の國は、
北の國は、



後名

昨者芝眉は親接を賜教を賜ふを得た喜何ら及ぶらん只性癖は
前より言ひ辞つた。元苔の降胸次の力一は迷へる事を得た徒
らう麻姑の勤つたは然りとて思ふ所を敢て之を杖ぶらうは抱
く必を敢て之を蔽ふるは釋の訥なる言の辞つた既持て必は
何れ頼むるは唯文の信をよきハ唯書のみ因て後子燕職を
忘れ敢て所見を布りんとは向らる貴下此文の長狭なるを坤悪
は一読の所を執りた書とて幸とてあつたの事

既昨日多々近々彼の夜の著作者を別人なると申せりと其実獨り
小注めたるは則ち何故に合作なるといひしは所質疑を固然の事な
唯生が黄吻青年もつらう彼の書で編みうると公言するは稍些しく据

傲り似ると配慮し切量る如く有後を知らず物なきは強
隠はも要すと思ひ頼る今度其実にて申さる唯評家にて賜
りし

第一 翻訳文の起原

中古幕府の政界は四民の心に撃つるの事漢文を奨励して講習
たつたゆゑに従前の勢力が一層加へ漢語の流行頻りき維新以後西
洋も精々新書舶來を翻訳の事起りし訳者も渾々旧幕時
代漢季修業の人をたれど和文の法を更々知らず輒ち漢文の法を因て之
を翻訳せんとするも漢と政本とを文法頗る殊るは訳文渾々意の
如くも之を之と交する日本の語法を二倍する政本と相似るは多きを
以て輒ち俗調を並用し現今つては俗名体即ち翻訳文なるもの漸
々其芽を萌あつた

第二 翻訳文の性質

訳文は必ずしも原文を忠実に訳すものではない。むしろ、原文の精神を捉え、それを日本語で表現しようとするものである。そのため、原文の文法や語彙をそのままに写し写すのではなく、日本語の文法や語彙に合わせて、原文の意味を忠実に伝えるように努める。また、原文の文体や表現方法も、日本語の文体や表現方法に合わせて、原文の精神を忠実に伝えるように努める。そのため、原文の文法や語彙をそのままに写し写すのではなく、日本語の文法や語彙に合わせて、原文の意味を忠実に伝えるように努める。また、原文の文体や表現方法も、日本語の文体や表現方法に合わせて、原文の精神を忠実に伝えるように努める。

石を遺留せしむるや地球の廣大科匡の數多形依るべきものや傳
殊體なる事を得べし凡均く人類なり其人情に至るを之を心理

子微なるは互に異なる事無きも敗る人情を異るせば其他の細事な是
猶年の何ぞ守らば難ん殊に及んや十夜の第一主眼となればこ
れ只人情に在りとも譯者の輿論あるを也

然るに則ち右の如き翻訳体の小説ありて世人は喋々せざるを何
業の縁由たる他無き世人は其眼を多く作者の眞眼氣と兼
備するもの無れども近來せよと純粋なる和文で作る者も無く別
加ふるも作者の因循或は時流に歩み進め世間の文のそせ復れ
の道辭巧妙なる新聞記者は駁せざるを慮り絶く論ぶる事も無
かれ世間のそせ愈深なり是即小生が純粋和文(古俳和文)を好
む所以は其草紙の自序に於ても亦此事を論ぜんと腹振るる様
ものなり

又と翻訳者

或は少くも古今の翻譯文を評するに和文の紀律は合するや否と
あつた之を指摘するに當り得べきものありん是の如きを偏見を免
くを得ざる論はこそ元來日本の國語を以て誦讀せし通る以上は
假令漢字より亦も是れ日本に文章なり既に日本の文章ありて
純粋正真の紀律は合すべしと爲すも非文の文と言ふべき
も唯此に注意せざる事や文章思想の二箇の物なり以上論じ
て母と爲すも蓋し文章の外完全なる文中思想の至るを假令漢字
に錯雜を判然非疎を現すも姑く時を以て處し一考へ喋々ある
ものなり

以上述べたる條に於て譯文は誤れども亦譯文は非ざるも然れど作
者が無識なる高下異の認程を爲すと括然顧みざるものなり否
自
然るも然るものなり是れ後述する必々其拙劣の故なりとも亦唯

其文のそせは凡翻譯文にも通用あり有る必の謬なり

第一の誤の眞理を知れば其第一の道徳を以て其第一の義國と

然るもそのまゝに是より後述するに於て其拙考の巨を以て亦唯

其文のまゝに翻訳文として通用せしむる所の謬

第一、小説の真理を知りて猥に道徳を以て模型と爲し小説を以て箴言と爲す事

第二、趣向皆渾く前人の糟粕より後より虚飾の巧辭を構へ換骨脱胎と稱する事

第三、例の所を漢土四大奇書後く所の封建時代を以てする事

第四、文章の致を失ふ事
昆頭の文体天保風を以て思ひ收束の文体明治風と変じて更に秩序の無きこと

第五、或は作者の蕩荒なる罵詈雑言と野卑とを主眼と爲し軽浮と猥褻とを重要と爲す事

第六、心理考を以て知るに巻中の人物の想像上の物を出し地理を以て知るに無上の腹後を作り齷齪考を以て知るに人体の治療を以て陳腐の証と作り成し服色制度の畦代を變易せしむるの爲し

行の故事熟字の出入を以て知るに腹後の見を以て書し博物考を以て講せしむる天下事物の謾後を天文地文を以て考へて疾風烈雨天変地異を漠然と綴る輩は此輩の誤を以て考へて

以上の誤謬を觸れざるに善無く書きたるは我國小説中幾何なりと蓋し作者の小説を以て字面を以て拘泥し其紙然たる美術たるを知らざるは故の効

前文既述する所の唯を生ずる所見の殊に季期試験中僅に尺寸の暇を偷し筆を以て認めざるを幸と草稿を以て言及するもの

必しも有らん唯願するに之を筆を以て全紙を全うし其意を文外に思ひし筆を拙考を以て示論するに於て

追伸 既下貴下の誤の如く蘇海文を多く見れば彼が妙處を以て

幾多の誤りがある事を知るべきなりと云ふ事

三

三

三

三

天吹



緑芽沼第



同志例る夢の跡ては同々亦
 夢が跡と改むるの跡は夢が跡と
 改むる時を暗々裡に跡を跡にして
 意を生むん
 (未完)

我樂多文章十五在示所載

二幅對卷少年次女内

白菊兒が崩投身の段



緑芽沼第



我樂多文庫十五卷所載
 二幅對卷少年姿の内
 白菊兒ヶ端投身の段






美妙初期雜稿
並
綠茶書庫稿



本間文庫
文庫 14
A 90